

計量国語学会 第六十回記念大会開催予告

研究発表募集及び招待講演のお知らせ

計量国語学会第六十回記念大会を開きます。当学会非会員の方も参加（聴講）できます。多数の方の参加を望みます。スケジュールの細目は、8月上旬に葉書とメールでご案内します。研究発表の申込みは下掲要領によって下さい。今回は第六十回記念大会のため、計量言語学についての招待講演も予定しています。招待講演の詳細についても下記をご参照ください。

大会開催予告

会場 日本大学文理学部（東京都世田谷区桜上水）

<http://www.chs.nihon-u.ac.jp/access/>

（右の二次元バーコードは上記のURLと同じです）

※京王線 下高井戸あるいは桜上水下車，徒歩8分。

日時 2016年10月8日（土） 午後1時から（予定）



大会参加費

会員・非会員にかかわらず参加（聴講）は無料です。予稿集は実費をご負担いただきます。

懇親会

大会終了後に懇親会を開催する予定です。会員・非会員にかかわらず参加できます。また学生会費を設ける予定です。発表者や他の大会参加者との交流の場としていただければ幸いです。場所、会場等の詳細については8月上旬頃に学会ホームページやメールでご案内します。

研究発表申込み要領

発表資格

- ・単独発表の場合： 当学会会員に限ります。ただし発表申込みと同時に当学会に入会することができます。その場合は学会事務室 office@math-ling.org にもメールでご一報ください。入会連絡先は下記発表申込のアドレスと異なりますのでご注意ください。
- ・連名（共同発表）の場合： 少なくとも1名は当学会会員である必要があります。

研究発表申込み受付期間 6月1日（水）～7月13日（水）

発表時間 発表時間は20分，質疑応答は10分です。

発表申込み方法

次の(a)から(e)および(h)（必要に応じて(f)(g)も）の事項を明記した申込書を，学会事務室に提出して下さい。

メールでも受け付けます。要旨を発表申込み用アドレス submission@math-ling.org宛に，Word ファイル（またはテキストファイル）と PDF ファイルでお送りください。メールの件名には「大会発表申込」とお書きください。

学会ホームページに「大会発表申し込み用紙」（Word 版，PDF 版，テキストファイル版）があります。よろしければお使いください。

- (a) **発表タイトル** 申し込み後の発表題目の変更は出来ませんので，ご注意ください。
- (b) **発表者氏名・よみ・ローマ字表記** 連名の場合，全員分お書き下さい。
- (c) **所属および会員・非会員の別** 連名の場合，全員分お書き下さい。
- (d) **プロジェクトの使用の有無**
- (e) **採否決定の通知先** 7月下旬に採否を通知します。
- (f) 出張依頼文書が必要な場合の宛名・宛先
- (g) その他の連絡事項
- (h) **要旨** 要旨は 40 字×30 行から 35 行（図表を含む）。発表採択の場合，この要旨は 30 巻 7 号の「大会記録」に掲載します。

予稿集執筆について

大会の予稿集を作成します。発表採択の場合，6 ページ以内（40 字×40 行），8 月中旬締切で，予稿集の原稿を書いていただく予定です。詳細は採択の通知と共に，発表代表者の方に個別にお知らせします。

大会招待講演

国際計量言語学会の元会長で *Journal of Quantitative Linguistics* 編集長の Reinhard Köhler 教授（ドイツ・トリア大学）による，計量言語学に関する招待講演（英語・通訳なし）を予定しています。講演題目は「Quantitative Linguistics in Europe: Principles of the Philosophy of Science as Applied to Linguistics」（ヨーロッパにおける計量言語学—言語学に適用される科学哲学の諸原則について）です。要旨（和訳・原文）は下記をご参照ください。また当日の予稿集には，講演を聞きながら内容を確認していただけるように，さらに詳しい要旨（英語・和文対訳有り）¹を掲載する予定です。



Reinhard Köhler 教授

¹「詳しい要旨」に「和文対訳有り」を追記しました。（2016 年 4 月 27 日）

Guest Lecture

Quantitative Linguistics in Europe Principles of the Philosophy of Science as Applied to Linguistics

ヨーロッパにおける計量言語学—
言語学に適用される科学哲学の諸原則について

Reinhard Köhler

(University of Trier, Computational Linguistics and Digital Humanities, Germany)

Keywords: Quantitative Linguistics, Philosophy of Science, Europe

講演要旨和訳

一般的な科学哲学の基本的な用語と概念を用いて、計量言語学の研究手法と方法論について講演を行う。

普遍的な、テキストの頻度構造法則「ジップの法則」を含むジップの独創的な研究以来、ヨーロッパでは、計量言語学の研究手法と方法論が進められ、特に、ガブリエル・アルトマン教授（元ボッフム大学言語研究所）が言語学に導入した方法論的・認識論的原理によって、計量言語学は推進されてきたといえる。アルトマン教授はヨーロッパでは、数多くの法則や手法を発展させたことでその名を知られている。これらの原理は自然科学で積み重ねられてきた原理と一致している。何十年かの実証をともなった哲学的考察により、自然現象に関する研究と言語のような文化的現象に関する研究の間には、具体的な方法論の差異しかない、ということが明らかになった。

ヨーロッパの計量言語学の取り組みには、実証的（帰納的）及び理論的（演繹的）研究手法があるが、後者がより好まれる。演繹的仮説は、これまでの知識によって構築された、妥当と思われる体系の組織的な理由づけが出来るという点で有利だと考えられており、（帰納的に得られた）実証的データに対して徹底した検証を行うことによって、仮説が法則になる可能性もある。個別の事情に厳密に合致するような、理論的な理由づけが後で見つけられることはほとんどないため、経験的な発見から得られた仮説は法則のレベルに達するのが難しい。

講演は、どの分野の研究にとっても基本的な用語や概念の描写や説明から始める予定である。基本的な用語や概念とは、科学的問題、仮説、法則、境界条件、理論などであるが、これらの用語は言語学では混同されることが多い。講演では、ヨーロッパで積み重ねられてきた計量言語学の研究の原理の軌跡を追うとともに、実例を示しながらこれらの用語がどのように言語学の研究に使用されるべきかを見ていく。特に、新しい法則を見つけるための、演繹的な研究手法の例証を行う。法則や普遍的仮説を確立するところから始め、論理的結果を考察し、新しい普遍的仮説を開発する。次に、実証的研究によってこの新しい仮説を、仮説が法則的仮説として受容できるか棄却されるまで、検証を行う。棄却されるケースでは、法則や仮説の完全な、確立された体系というのは疑わしく、再度検証がなされる。最終的には仮説の誤りは突き止められなくてはならない。しかしながら多くの場合は、新しい現象の観察によって新しい法則の最初のアイデアが浮かぶのである。そうし

て、この分野のこれまでの知識に合致する理論的な論拠が探索され、検証可能な結果とともに一般的な仮説として確立されるのである。以降の手順は演繹的研究手法に拠る。

講演では、理論的進展のためだけでなく実用的な目的のためにも、法則の重要性も明らかにしたい。講演の最後には、理論的モデル化の背景—新しい法則的仮説を生み出す可能性のあるもの、またそれらが体系化できるものとして知られているもの—を与える試みを行っている、最近の2つの研究を紹介する。

講演要旨原文

On the basis of the fundamental terms and concepts of the general philosophy of science, research strategies and methods of Quantitative Linguistics are described, as conducted in Europe since George Kingsley Zipf's seminal work, including his famous "Zipf's Law" of a universal frequency structure of texts, and in particular guided by the methodological and epistemological principles introduced into linguistics by Gabriel Altmann, who is well known in Europe for his development of numerous laws and methods. These general principles are in line with those practised in the natural sciences. Philosophical considerations as well as some decades of experience show that only specific methodological differences between studies on natural phenomena and on cultural ones such as language can be found. European approaches include empirical (inductive) and theoretical (deductive) strategies with a preference on the latter ones. Deductive hypotheses are advantageous because of their systematic justification in a plausible and well-supported system of previous knowledge and have a good chance to become laws, after intensive tests on empirical (inductively acquired) data. Hypotheses which were set up on empirical findings only have not so good chances to become laws because it is not very likely that a theoretical justification can be found afterwards which matches exactly the given findings.

The presentation starts with a description and explication of some terms and concepts which are fundamental for any kind of research, such as (scientific) problem, hypothesis, law, boundary condition, theory, and explanation — terms which are often confused in linguistics. Examples are given of how these terms should be applied in linguistic work if the principles of linguistic research as practised in Europe are followed. In particular, the deductive strategy to find new laws is exemplified: Starting from established laws or universal hypotheses, logical consequences are considered and formulated as new universal hypotheses. Then, empirical studies test these new hypotheses until they either are accepted as law hypotheses or rejected. In the latter case, the complete established system of laws and hypotheses must be doubted and tested again. Finally, the mistake in the theoretical assumption must be localised. In many cases, however, the first idea for a new law raises with the observation of new phenomena. Then, a theoretical reason is searched for which should be in line with previous knowledge in the field, and formulated as a general hypotheses with testable consequences. The rest of the procedure follows the deductive strategy. The talk will also shed some light on the importance of laws not only for theoretical progress but also for practical purposes. Finally, two recent approaches are described which attempt to give a theoretical modelling background from which new law hypotheses can be derived and known ones can be systemised.